系統解剖学実習口頭試問が強烈な印象でした。箱からおみくじの様にお札を引き、そこに 書かれた事項を説明するというやりかたです。

実習で御遺体と向き合い、かつ教科書で知識を補わなければ合格できない構成でした。

最初の口頭試問の際、覚えるべき情報量に圧倒された事が思い起こされます。

震える手で引き当てたお札を開けると、「C4」の文字（第４頸神経のこと）。瞬間あたまが真っ白となりました。

唾をのみこみ、震えるピンセットで、御遺体の頸部のC4の出所あたりを指し、「これがC4 の根部で…」と言った瞬間、「合格！」先生の厳かな声が響きました。

ええ～？合格ですか？

これは先生が迷える医学生に「今後しっかり勉強しなさい」と慈悲の裁定を下したに違いないと思いました。

嬉しさの後に、医学生として反省と自覚が芽生えたような気がしました。

山 城　　哲　長崎大学熱帯医学研究所 教授

解剖学実習とウィンドサーフィンのオリンピック選考が同時期にあったため、ほとんど実習に参加できませんでした。

口頭試問もみんなと一緒に受けられなかった私のために、先生はわざわざ模型を使ってテストをして下さいました。

先生がいなければ私は卒業できなかったかもしれません。

古閑 比佐志

漳州正興医院（Zhangzhou Zhengxing Hospital）

実習終盤に写真部の協力で撮った写真に『格物致知』という言葉をいただきました。

写真の中の先生は40歳です。

医学を生業とする者の心構えを、折に触れて拝受できた我々は、幸せ者です。

さらに、やんちゃだった二期生には「不逞の輩」という言葉を笑顔で教えて下さったことも覚えております。

我 謝 道 弘　医療法人おもと会大浜第二病院 副院長

解剖学の試験を翌週に控えた最終講義で、先生に質問がでました。
「今回の試験は、日本語、ドイツ語のどちらで出題されますか？」。
一期生は先輩がいないため試験の傾向が全くわからなかったからです。
先生は、一言「ドイツ語です」と答えられました。
教室は悲鳴にも似た深いどよめきに包まれました。
別な学生が手をあげました。
「私は、教養ではフランス語を選択したのですが…」。
先生は、しばし沈黙の後、
「う～ん？わかりました！　それではフランス語でも問題を作りましょう！！」。
質問した学生は目論見が外れて苦笑い、教室内は大爆笑です。
私は、先生はドイツ語、フランス語が堪能であることを、後で同期生から知らされました。
講義の最後に座右の銘を披露されました。
「施して報いを願わず　受けて恩を忘れず」でした。
田中先生らしい清々しい箴言で、最終講義を閉められました。
私は本物の学者だと感動したことが、今でも忘れられません。

健 山 正 男　琉大 感染症・呼吸器・消化器内科学 准教授（一期生 第４代同窓会会長）

寄稿できなかった方々も、皆同じ思いでおられるでしょう。
ありがとうございました。